国際化のモデルとしてのアメリカ人像の批判的検討

――アメリカ人は人の目を気にしなくて，日本人は気にするというのは本当か？――

木　村　英　憲

本論の目的

日本人についてよく言われる言説に，さらには証明するまでもない自明のこととしてよく言われることに「日本人は人の目を気にして思った通りに行動できない，だからイエス，ノーをはっきり言えない」というのがある（布留川 2008，賀川 1997 pp. 22–31, 2001, Bailey 1990）。これと対になっているのが欧米人，とりわけアメリカ人は人の目を気にしないで思ったことをそのまま言葉や行動に表す人たちだというとらえ方である。さらにこの言説は原因についても言及する。日本人が人の目を気にして思ったことを言葉や行動にして表に出さないのは，日本が「出る杭は打たれる」社会で，そのため日本人は本音を隠して建て前しか言えないからであると言うのである（Bailey 1990 p. 213, p. 218，布留川 2008 p. 123，賀川 1997 pp. 94–97）。

この本音をストレートに言わないことは，日本人に独得のこととされ，さらには日本人が異文化の人と接するとき，とくに英語圏の人々と接するときに“矯正”しなくてはいけない悪弊として取り上げられる。もう一つ“矯正”されなくてはいけないとされるものがある。英会話の授業で英語を母語とする教師を，たとえば“Professor Williams”と呼ぶと，“Don't call me Professor Williams. Call me Bill.”などと言われて“矯正”されるのが常である。しかしいったん身についた文化は条件反射的に無意識に体が動いてしまうもので，それを“矯正”するのは至難のわざである（ホール 1996）。そのためなかなかファースト・ネームで呼べないでいると，日本人は，異文化を受け入れようとしない体質の持主だからだという言われ方をされる。他方，この言い方は「自分たちは異文化に開かれている，だから自分たちの国，たとえばアメリカやカナダは多様な文化の存在する多文化社会だ」と自慢する英語圏出身の教師が少なくない，いや大多数であることとセットになっている。しかし日本在住の英語圏出身の先生たちがもし異文化に開かれているならば，教師を“～先生”と呼ぶ日本の呼称文化を受け入れてもいいところであろう。従って，日本人に対して「恥ずかしがらないで自分の意見を言いなさい，自己主

張しなさい」と諭すこともしないところである。いわゆるネーティブの英語教師が日本人に英語を話せるようにすることの背景には“人の目を気にする日本人の特有の国民性”から日本人を解放して，思ったことを躊躇しないで堂々と言える自己主張型の人間へと改造しようとする意図が潜んでいるかのようである。しかし日本人にしてみれば自然にわき起こる，たとえば“Professor Williams”という言い方を抑圧するのではなく，人の目を気にしないで思ったことをそのまま言うことが自己主張となる。

日本人に独特とされる文化，この場合，呼称文化であるが，を捨てさせ，自分たちアメリカ人やカナダ人などのように互いにファーストネームで呼び合う文化を身につけさせようとする動機は善意によるもののようだとしてもそれは重要ではない。重要なのは，これら英語圏の教師たちが自分たちのことを互いの文化を認め合う，開かれた精神の持ち主と思っているが，それが建前にすぎないということに気がついていないことである。何故ならこの建前の下，事実上，日本文化を捨てさせ，アメリカ文化なりイギリス文化なりカナダ文化なり，すなわち英語圏の文化を受け入れさせて，彼らと同じ人間に日本人を作り変えるという行為，すなわち同化（assimilation）を行っているからでありしかもそのことに気がついてないからである。善意だからという議論はこの同化の側面を隠蔽することになりかねない。

さてファーストネームで呼び合うことについては，肩書きで呼ぶことと違ってフレンドリーな間柄にすぐなれ，なおかつ一個人として対等な関係を築きやすいというメリットがあるとも言われる。ファーストネームで呼び合うことによって日本人を縦の関係から解放して対等な関係の世界に誘（いざな）うというのである。日本人の側にもこの考え方に強く賛同する者が少なくない。たとえば難民問題にも貢献した犬養道子は「アメリカ人が相手である限りキザでも何でもない。ファースト・ネームで呼びあうというそこまで行かなければダメなのだ。そこまで行かないのは異常なのだ」とまで言う（犬養 1986 p. 23）。ここには正常なアメリカ人に対して異常な日本人という二項対立がある。ところでファーストネームで呼び合うことが目指す対等な間柄という視点からすれば，いつも一方が指示して他方が指示されるということはないはずである。指示・被指示の関係は一方が権力を持ち，他方が持っていないという上下関係の下で生じることだからである。いったん身についた文化を意識的に抑制するのは並大抵なことではない。従って対等な関係の下では一方だけがその大変な努力をして他方に歩み寄るという非対称的なことは起きないはずだ。対等な間柄では互いに努力をして互いに歩み寄るのが常態である。しかし英語力をつけることによって，あるいは異文化間コミュニケーション力をつけることによって，日本人をグローバル社会で通じる“正常な”国際人に作り上げるという熱気を帯びた動きないし主張に，これら2つの非対称性にもとづく同化が潜んでいることに気がつかれることは少ない。

英語を学びなおかつ英語の背後にある文化を学ぶという大義名分の下，このような同

化が着々と行われているとすれば，日本人はいつも自文化に引け目を感じ，結果，いつも自分たちだけが自文化を引っ込め，相手の文化を吸収する努力を払うことに問題を感じなくなっているのはことの自然な流れである。しかしこれはどう考えても日本人の側だけが相手の文化を吸収する努力をし，英語圏の人たちはしないという非対称的な関係である。異文化の人と居心地が良くてなおかつ楽しい関係を持つには，このような同化する，同化されるという上下関係にあることに気がつかなくてはいけない。ファーストネームで呼びあっても，いやむしろファーストネームで呼びあうからこそ対等に堂々と渡り合う関係になっていない事実に気がつかなくてはいけない。従って対等な関係の構築は，同化の関係へと追いやる思い込み，たとえば日本人は何々だが，外国の人は，とくにアメリカ人はその反対だというように言われていることを批判的に見て，これらがはたして事実なのかそれとも思い込みや決めつけなのか，素朴な違和感を動員することから始まるだろう。

素朴な違和感というのは，たとえば人の目を気にしない人間などいるのだろうか？ あるいは相手と自分の関係を上下関係の軸で見ない人などいるのだろうか？ という疑問である。批判的にみるというのはこの疑問はもしかしたら人の目を気にする日本人が“人の目を気にするのが人間だ”と思い込んでいるために出て来ている疑問かもしれない。あるいは上下関係を気にする文化の人間が，そうでない文化はあり得ないとする自文化中心主義に縛られている故の疑問かもしれないと省りみることも含む。しかし疑問を投げかけるだけでは話が前に進まない。そこで本論ではアメリカ人は人の目を気にしないのか，上下関係を気にしないのか，これらの疑問を解明するために，実際に暮らしてみて接したアメリカ人はどうなのか，またアンケートや実験結果に照らして概観し，アメリカの身上でもある異質な人間を受け入れる開かれた社会かどうかを検討したい。

この疑問は，たとえば白人と黒人の関係という人種間関係の場面においてみると次のようになる。黒人をかばう白人のことを指す言葉に“nigger lover”（「黒ん坊」の肩を持つやつ）という蔑みの念の込められた言葉があるが，アメリカの白人はこのまなざしを向けられても，このまなざしに抗して，人種間平等の理念や人種を超えた博愛を実践できるのだろうかという疑問になる。逆に1964年の公民権法案成立以後，人種主義（racism）を公の場面で認める発言には厳しいまなざしが向けられたり法的制裁が科せられるなかで，内心で黒人に近所に引っ越してきてもらいたくないと思っている白人が，その気持ちをどんな状況でも言葉にするのだろうかという問題にもなる。

人の目を気にするというのは，人間という社会的動物の２つの本質にかかわっている問題でもある。人は自分だけで自分を承認するのは非常に困難で，他者の承認があって初めて自己肯定感を持てる存在と考えられるからだ。また組織なりグループなりに所属したいとか誰かとつながっていたいという願望を持った存在でもあるからだ。従ってあの人はあるいはあの人たちは私と，あるいは私たちといわゆる俗に言う「人種が違う」

という意味合いでの異質な人間だと見なされると，同じ人間だと承認されない。所属願望や絆を求めるのが時代や地域を越えた人間に共通した普遍的な願望だとすると，人の目を気にしない人間というのは，承認されなくても平気，どこにも所属しないでも平気な人間ということになる。このような人間はニーチェの言う，自分の信念や高揚感を唯一の行動原理とする超人（Übermensch）に相当する（ニーチェ 1967）。このような人からの承認がなくてもどこにも所属しなくても，高揚感や信念だけで我が道を行ける人間は，理想としてあるいはファンタジーの世界には存在するだろうが，はたして現実の社会で生身の人間が超人的な，あるいは超俗的な個人主義者でいられるのだろうか？
日本で言えば，俗の世界から身を退いたとされる鴨長明にしても西行といった超俗の人たちにしても，人々の住んでいるところに近い山里に身を置いていたのであって，全く人のいないところにいたわけではない（家永 1947）。もしいるとしたら，アメリカの人種間関係で言えば承認欲求よりも，所属したい気持や承認欲求よりも，反差別の理念の実現を優先する正義感の強い人物だったり，マイノリティの境遇を自分事のように感じる感性すなわち強い共感の持ち主かもしれない。このような人間がいたとしたら，マジョリティによるマイノリティへの偏見と差別を非難し，マイノリティの側に立ち，彼らを近隣や職場，あるいは自分の私的な人間関係の領域に受け入れる原動力は正義感なのか，マイノリティへの感情移入なのか，はたまた別の何かなのかという問いに，本論で解明を試みる疑問は着地する。筆者の深い問題意識はここにあるが，本論はその前段階にとどめることにして，この深い問題をデータによって検証することは別の機会に譲ることにしたい。

1　「アメリカ人は人の目を気にしない」の検証

まずは「アメリカ人は人の目を気にしないで思ったことをそのまま言葉にし，また行動に移す」というのが本当なのか，事実なのかどうかを事例やアンケートや実験結果によって検証してみたい。

事例　筆者の個人的経験：服へのこだわり

筆者は1965年から1966年にアメリカはイリノイ州の高校にAFS（American Field Service）という交換留学制度で1年間留学したことがある。その時に目についたのは彼の地の高校生たちが服を毎日，とっかえひっかえしていたことだった。女子の中には少なくとも1週間は同じ服を着ないようにするために，友だち同士で服の貸し借りをしていたものもいた。このことについてホームステイした家族の男の子に聞いてみたら，同じ服を着ているのを見られるのが嫌だからだということだった。その後，場所と年代もかわって，1981年から1986年の5年間，ニューヨーク州立大学の大学院（ニューヨーク州立大学ストニイ・ブルック校）に留学していたときのことだが，離婚女性の家庭の調査をした。ある家庭の中学生の女の子は夏休みの最後の日，翌日の新学期の初日に何

を着ていったらいいか悩み，そのいらいらを母親にぶつけていた。どの服を着ていったらよいか決められないという悩みは，思春期にありがちなことで，取り立てて言及することではないと言えばそうなのかもしれない。しかし，「アメリカ人は人の目を気にしない」という言説に照らすと，これは起きないはずの話，あるいは説明のつかない話である。

1981年から1986年の5年間，筆者が大学院生として在籍していたニューヨーク郊外の大学では，ちなみにこの大学には1990年から1991年にも在外研究でも1年間滞在したが，いずれの場合も一見すると上の2つの事例とは逆の現象が起きていた。1980年代の5年間の留学期間，筆者が目にしたのは，大学院生も学部生も来る日も来る日もTシャツとジーンズ姿だったことだった。最初は襟のついたシャツを着ていた筆者も次第にTシャツを着るようになった。それは衿付きのシャツを着ていくと，何か特別のことでもあるのかと聞かれて，まわりを見回したら，Tシャツばっかりだったことに気がついたからである。それはその5年間，そして1990年から1991年の時もずっと変わることがなかった。同じ服装をしているのは単なる偶然とか流行という面もあるだろうが，それ以外のことが作用していた。襟のついた服を着ていたら，あれ，どうしたの？ という目でまわりから，それもいつも見られれば，無意識のうちに，みんなと同じ服を着るようになったとしても，人情としては分かる話である。しかしアメリカ人は人からどう見られるかを気にしないなら，自分の好みの服装をするはずである。しかし実際はほとんど誰もがあたかも制服のようにジーンズとTシャツ姿だった。ということは，本人たちはそう思っていないし気がついていないからなのだろうが，彼ら，彼女らも実は人の目を気にしているからだと考えると，この画一的な服装行動は説明がつく。ちなみに1990年の夏に学会でプリンストン大学に行ったときは別の形の画一的行動，すなわちブレザーを着ている学生が多かったのが目についた。

しかしアメリカ人に「あなたたちは本当は人の目を気にしているのでは？」と言ったら否定するだろう。否定するのにはもう一つの要因がありそうである。それは学校の先生であれ，親であれ生徒なり子どもをほめるときの常套句が “I'm proud of you, because you are unique.”（「特別な子なので誇りに思う」）というものである。親や先生といった目上の人間にこのように口をそろえて言われると，これは子どもたちにとってそうしなくてはいけないという規範になる。子どもや生徒の側からすると，いかに自分が人と違って豊かな個性を持った特別な子であるかということは親や先生，そうして同年代の子どもや生徒から一目置かれるための重要な条件になる。このように考えると，上に挙げた事例，すなわち女の子が新学期の前日にどの服を着ようか迷っていたのは，どの服を着ても他の子と違うユニークな自分になれないのではという不安を感じたからではないのかという可能性が出てくる。

ユニークさは自分自身で自分を認めるための条件ではあるが，まわりからユニークと

認められてナンボのものという特性でもある。よく自己同一性と訳されるアイデンティティというのはこのような特性のことである。このような特性には，能力（たとえば成績優秀，スポーツができる，ダンスがうまいなど），性格（たとえば素直で明るい，積極的など），所属（どこどこの有名大学出だ，どこそこの一流企業に勤めている，どこそこの高級住宅街に住んでいるなど）などがある。一般的に，どの特性も個人が服を選ぶように好きなように選んだり，作り上げることができるものではない。これらは2つの意味で社会的なものだからである。1つは生まれ落ちた社会や時代で支配的なものを個人が自覚しないで学習した，取り入れたものだという点においてである。後の1つは，この特性は親とか先生とか友だちとかみんなといった他者の承認が必要なものである点においてである。自分の考えるユニークさを他者もユニークと考えるとは限らない。上の女の子の例で言えば，これら2つのユニークさの不一致に悩んでいたかもしれない。すなわち一方でたとえ自分で気に入った服装でも，みんなからユニークなものと認められなかったらどうしようと不安になっていた。他方であまりにみんなとちがいすぎて反撥されたり白い目でみられるのもいやだと思い不安になっていたと推測される。

結果，みんなとほぼ同じ格好，たとえばTシャツにジーンズだが，一点だけちがうという妥協点に落ち着くことになる。しかしこのささいなちがいを拡大してとらえれば，他とあまり変わらないのではないか，画一的で多様性がないのではないかと疑うこともないし，そういう指摘をされても，うんそうだと認めなくてすむ。かくして自分はユニークだという自己像，すなわち人と違う個性豊かな自己というアイデンティティを維持することができる。

ユニークでいたいのになぜ浮くことをいやがるのか，なぜみんなと同じになりたいのか？　それは所属願望の方がユニークさよりまさっているからなのではないだろうか？違和感を覚えられるほど異なると，つまり浮いてしまうと，距離を置かれたり排除されたりすることをアメリカ人も恐れるからだと考えると説明がつく。

しかしアメリカ人の自意識の中では自分個人は，そしておしなべてアメリカ人は個性豊かだということになっている。しかしつき離してみるとどうだろう？　筆者の娘が1990年代の終わりにカリフォルニア州立大学ロサンジェルス校に留学していたとき，筆者にアメリカ人学生と留学生は服ですぐ区別がつくと言った。アメリカ人は圧倒的にTシャツが多く，あまりシュッとしていない格好をしているのに対して，こざっぱりしたおしゃれな服を着ているのはたいてい日本や韓国からの留学生だからと言った。アメリカ人が個性豊かならば，人の目を気にしないなら，自分の好みの洋服もひとによっていろいろと違うはずだ。結果，Tシャツとジーンズ姿だけでなく，おしゃれな服を着ている学生もいれば，ブランド品で身を固めている学生もいるはずである。実際は違っていたことからすると，上に挙げた解釈は妥当と言えそうである。

アーヴィン・ゴフマンという社会学者は，アメリカ人が自分がついている職業に期待

される行動にそった行動や態度をして，いわば素の自分を出さない事例をたくさん挙げている。たとえば高級車のお抱え運転手は人前ではふだんの癖，たとえばタバコをバスケットボールのようにゴミ箱に投げるといった癖を封印し，あたりに人がいなくなり自分一人だと分かると，この趣味に興じるという事例を挙げている（ゴフマン 1974）。同様に笑顔で親しげに客に話しかけるウェイトレスが，厨房に入るととたんに乱暴な言葉で客をこき下ろすという事例も紹介している（ゴフマン 1974. pp. 141–142）。人は地位に期待される役割を演じるのは当たり前と言えば当たり前の話だが，いつも素の自分を出すというアメリカ人についての言説からすれば想定外の行動である。しかしアメリカ人も仕事に期待される役割をしないとどう思われるかを気にしているからこそ，上のようなことが観察されたと考えた方が自然である。

日本人はKYを気にしすぎる，言い換えれば場の空気を読んで浮かないようにすることに気を遣いすぎるという日本人批判もある。しかしゴフマンの観察事例に照らすと，これは何も日本人だけではないことが分かる。その事例とは，レストランで隣り合わせた客が，お互いの存在に気がついたとき，気がついていない振りをするという事例である。ゴフマンはこのような気づかいを「察しよく（ゴフマン 1974 p. 270）注意を向けないこと（tactful inattention）というエチケット」と呼ぶ。この事例のおもしろいのは，気がつかれた方は気がつかれたことに気がついていない振りをする。そして隣りのテーブルの客が相手がそういうふりをしていることに気がついても気がついていないふりをする。まるで合わせ鏡のように循環するという。ゴフマンはこのようなことが起きるのは，メンツや体面を彼が観察したアメリカ人やカナダ人も気にするからだということになる（ゴフマン 1974）。

カップル社会

アメリカやカナダでは，そしておそらくヨーロッパでもそうだろうが，私的な場所だけでなく公的な場所でもカップルで出かける習慣がある。映画「ダイ・ハード」で主人公の刑事のジョン・マクレーンは夫婦仲が悪くて，自分はニューヨーク，妻はロサンジェルスと別居している。しかしクリスマスの日，妻が住んでいるロサンジェルスに飛行機で行く。妻の会社のパーティに出席するためである。このパーティは日本で言えば忘年会に相当するのだろうか。ところで日本では夫の会社の忘年会に妻も参加するというのは一般的ではない。この違いについて，アメリカのこの習慣に好意的な解釈をすれば，アメリカの会社は社員の配偶者にも開かれているということになるだろう。この解釈を適用すれば，日本の会社は配偶者を忘年会に招待しない，閉鎖的ということになる。しかしゴフマン流に言えば，仲が悪くても夫婦同伴でいないと，仲の良い夫婦という体面が保たれないためという話になる。しかも妻は夫の体面を保つために夫の会社のクリスマスパーティに出ているとすれば，夫に従属しているということにもなりかねない。この点日本では妻は別に夫の会社の忘年会に出て，愛想を振りまく必要はない。と

ころでこの映画の展開は，妻の会社の入っているビルがテロリストに襲われ，パーティ会場にいた人たちは人質になり，主人公の刑事を演じるブルース・ウィルスは八面六臂の大活躍をし，テロリストをやっつけるというハリウッド映画にありがちなパターンをくり返すものである。

警官と言えば，筆者がかつて留学したニューヨーク州立大学の同じ研究室に，警官をしながら犯罪社会学で博士論文を書いている男がいた。寿司好きな男で，すぐに私を寿司屋に連れて行ってくれた。そのお返しに家に食事に呼んだが，彼一人だけで来た。それから5年後，私が日本に帰る際にまた寿司屋に連れて行ってくれた。そのとき彼は「お返しで家に呼ばないでいることをずっと心苦しく思っていた。実は妻と不仲で呼べなかったからだ」と謝罪した。奥さんが実家に帰っているからとか，用事で外出しているからとか，いくらでも言えたと思うが，このように謝罪したということはホームパーティは，夫婦でもてなすものという社会通念があるからだろう。夫はホスト役をし，妻はホステス役をしないと，仲が悪いのではと疑われるぐらいに最低限のことという社会的了解があるからだろう。しかし通説の言う通りアメリカ人が人の目を気にしないのなら，私たちを家に呼んだだろうし，また5年間も悩まないで，すぐに打ち明けたはずである。彼の日本文化好きもお寿司にとどまっていて，別にいつもカップルでなくてもいいというカップル文化の縛りからの解放までには至らなかったようである。カップルでいることが常識となっているのは，アメリカの主流文化の体現者たる大統領もよく夫婦でいろいろなイベントに参加し，仲のよいところをアピールする。性的志向では主流文化からの逸脱者たるゲイやレズビアンもこのカップル文化からは逸脱しないで，しっかり「遵法者」ぶりを示していて，いつも特にパーティやコンサートといった人の集まるところにはカップルでいるのをよく見かけた。他方，日本ではたとえばゲイがよく集まる名古屋の今池の某所やおかまで有名な新宿二丁目に行っても，一人で来ているものが大半でカップルは少ない。

人の目を気にすることを示す量的データ

NHKの英会話のテレビ番組で一世を風靡した人に横浜国立大学の教授だった田崎清忠という人がいる。田崎は，アメリカ人は知り合いが新しい服を着てきたら似合うわねとほめるが，その理由は「一般的に言うと，アメリカ人は子供の頃からプラスのフィードバックになれている」からだと言う（田崎 1989 p. 58)。その点，「「日本人はいちいち言わなくても……」と口をつぐむ」と言う。アメリカ人にならってもっとほめようというわけだが，アメリカ人も実はほめたり，ほめられたりするのが内心は嫌な人が過半数を超えていることを示す調査結果がある。言い換えると本心からほめているのではなく，建前でほめているのではないかと思わせる結果である。それはハリスというアメリカの調査会社が全米各地のアメリカ人の中から無作為に抽出した3,154人を相手にアンケートをとった調査の結果である。表1に本稿にかかわる4つの質問と回答を示した

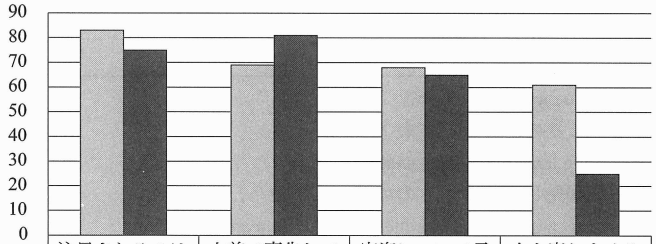
表1　アメリカ人は実は人の目を気にしている

	嫌だ
Do you like to be center of attention? （注目の的になるのは好きですか？）	83％
Do you like to take lead in talking socially? （公の場面で率先して話をするのは好きですか？）	69％
Do you like others to notice and comment on your appearance? （服装や容貌などに注目されて何か言われることは好きですか？）	68％
Do you like to entertain others? （人を楽しませるのは好きですか？）	61％

が，最後の「人を楽しませるのは好きですか？」が，その結果である（Harris 1987 p. 38）。

最初の「人から注目されるのは好きですか？」という質問に83％のアメリカ人が嫌だと答え，3番目の「服装や容貌などについて人に気づかれて何か言われることは好きですか？」という質問に68％が嫌だと答えている。アメリカ人回答者は人の目が気にならないというイメージに反して，大多数は人から注目されるのが嫌で，また目立つのも嫌という結果になっている。もしアメリカ人が人の目を気にしないのなら，いずれの質問項目にも100％の回答者が好きと答え，嫌だと答えるものは0％のはずである。また「日本人はシャイだがアメリカ人はそうでない」のアメリカ人の部分もあやしい。なぜなら「公の場面で率先して話をするのは嫌い」というアメリカ人は69％もいて，そして「人を楽しませるのは嫌だ」というアメリカ人も61％もいるからである。アメリカ人は学校でも職場でも，何げない会話においてもホームパーティなどにおいても，ジョークを飛ばしたり，ほめたりして人をいい気分にさせるのが好き，すなわち社交的というのもイメージにすぎなく，内心では嫌がっていて本心からではない人が61％，すなわち3人に2人もいるということになる。

他方，日本人はイメージ通り，人の目を気にし，消極的な国民性の持ち主なのだろうか？　筆者は2011年春学期，愛知学院大学文学部の国際文化学科とグローバル英語学科の学生，170人にこれらの質問をしてみた。その結果を図1と表2にアメリカの結果と対比する形で示した。「日本人は人の目を気にする」というのは事実上，「日本人は**みな**人の目を気にする」と言っている。これが本当ならば，100％の回答者が「人から注目されるのは嫌い」と答えているはずである。しかし実際はこの予想より25ポイント少ない75％のものしか嫌だと答えてない。しかもアメリカの83％を8ポイントも下回っている。容姿や外見について言われるのは嫌だという回答者も，「日本人は**みな**人の目を気にする」ならば，100％のはずである。しかしこれも予想より35ポイントも少ない65％である。これはアメリカの68％とあまり変わらない。筆者が聞いた学生たちはアメリカ人回答者よりも嫌だというものの割合が少ない。すなわちイメージに反して，日本人の方が人の目を気にする者が少ないという結果になっている。以上からこれらの2



	注目されるのは嫌だ	人前で率先して話すのは嫌だ	容姿について言われるのは嫌だ	人を楽しませるのは嫌だ
ハリス	83%	69%	68%	61%
木村	75%	81%	65%	25%
差	−8	+12	−3	+36

図1　アメリカ人は人の目を気にしないのか？　日米比較

注：差というのは木村の回答者の％からハリスの回答者の％を引いたもの。単位はポイント。－の符号のついているのは木村の％がハリスのを下回っていることを示す。＋の符号のついているのは上回っているという意味である。

表2　アメリカ人は人の目を気にしないのか？　日米比較

質問 ～嫌だ	実際の％		日米同じ時の％	米－同じ時の％	日－同じ時の％	χ^2	p
	米	日本					
人から注目されるのは	83%	75%	82.6%	+0.4	−7.7	7.652	0.05%
公の場で率先して話すのは	69%	81%	69.6%	−0.6	+11.0	10.508	0.01%
容姿について何か言われるのは	68%	65%	67.9%	+0.1	−2.8	6.240	23.8%
人を楽しませるのは	61%	25%	59.1%	+1.9	−34.0	88.212	＞0.01%

注：「米」というのはハリスの調査結果，「日本」というのは木村の調査結果。

「日米同じ時の％」というのは日本とアメリカで嫌だという回答者の割合に差がないと仮定した時（この仮定は“帰無仮説”と呼ばれる），すなわち嫌だと答える者が日米で同じ割合と仮定した時の％のことである。「米－同じ時の％」は，各質問に実際に嫌だと答えたハリスの回答者の％が，帰無仮説が正しいと仮定した時の％，すなわち日米で差がない時の％をどれだけ上回っているか，下回っているかを示したものである。

“－”がついている場合には日米で差がない時の％を下回っているという意味。“＋”がついている場合は，日米で差がない時の％を上回っているという意味である。

「日－同じ時の％」というのは各質問に実際に嫌だと答えた木村の回答者の％が，日米で嫌だという回答者の割合に差がないとした帰無仮説の％よりどれだけ上回っているか，下回っているかを示したものである。

“χ^2”はカイ2乗値という統計値を表した記号。帰無仮説と実際の回答のズレが大きければ大きいほど，この値も大きくなって，偶然で生じた確率は小さくなるという相関関係がある。

“p”は“probability,”すなわち確率の略だが，ここでは“有意確率”(significance probability）という確率のこと。有意確率とは，日米間で嫌だ答える回答者の出現率に差がないと仮定した時，偶然で実際に嫌だと答えた回答者の人数や％になる確率が5％以下の確率のことを言う。

“＞0.01％”は有意確率が0.01％より小さい，すなわち0.01％以下，0.01％を下回るという意味である。

つの質問で判断すると，アメリカ人の方が人の目を気にする傾向が強いと言えそうである。

他方，「アメリカ人と違って日本人はシャイで積極的でない」については図1を見ればわかるように，日本人の方がシャイな人が多いという，イメージ通りの結果になっている。具体的には「人前で率先して話すのが嫌だ」という日本人はアメリカ人より12ポイント多い。しかし「人を楽しませるのが嫌だ」に至っては，日本人は4人に1人しかいないが，アメリカ人は3人に2人が嫌だと言う。この結果にはこの調査に協力したほとんどの学生が驚きを示していた。

ところで学生，それも特定の大学の特定の学科の学生の回答だけで，日本人はアメリカ人とくらべて人目を気にしないといった結論を導き出せるかという疑問がある。これについて言えば「日本人は人の目を気にする」という言説は「日本人は**みな**人の目を気にする」と暗に言っている言説である。裏返して言えば，そうでない日本人の存在を想定しない，すなわち多様性をはなから考えない見方である。このようにみな同じだとする見方のことを紋切り型の見方とかステレオタイプと言う。しかもステレオタイプは一部の人しか持っていない見方でなく，大多数の人が持っている見方である。たとえば「血液型のO型の人は～だ」という特徴付けであるが，この見方はたいていの人が多分そうだろうと思っている見方である。「アメリカ人は人の目を気にしないが日本人は気にする」にしても，大部分のアメリカ人も日本人も事実そのものだと思っていて，疑いもしない。言い換えれば，ステレオタイプとは，もしかしたらちょっと極端すぎる話なのでは？ と疑いの目，すなわち批判的な目を向けない見方，裏返して言えば，事実そのものと鵜呑みにしている見方である。

ステレオタイプはかくして最初に結論ありきのものの見方とも言える。このため，ステレオタイプを事実そのものと思い込んでいる人は，地域や職業や年代や性別によっては，たとえば人の目を気にしない人がいるのではないかということは思いもよらない。もしステレオタイプの言う通り，地域，職業，年齢，性別にかかわらず日本人はみな人の目を気にするとすれば，日本人はどの地域の人でも，どの年代でも，男女，職業を問わず，人の目を気にする者ばかりということになる。これをパーセントで言い表せば100％ということになる。しかし調査結果はこの予想をくつがえすものであった。愛知学院大学文学部の国際文化学科の学生やグローバル英語学科の学生に当てはめても，たとえば「人から注目されるのは嫌だ」と答えるものは100％のはずである。他の質問項目についても同じ結果になると想定される。しかし実際は上から順に25ポイント，31ポイント，35ポイントと，予想の100％をかなり下回り，最後の「人を楽しませるのは嫌だ」に至っては，75ポイントも下回っている。

アメリカ人はジョークを飛ばしたり，ほめたりして人をいい気分にさせるとアメリカ人も日本人も思っているが，しかし内心では嫌がっているのは61％，すなわち3人に

表3　人の目が気になるのは2割から6割

	人の目が気になる
自分の好きな服でも流行遅れだと気になる	40.4%
学校でお昼ご飯の時，一人で食べているのを見られるのが嫌だ	35.6%
いつまでも独身だと人からどう思われるのか気になる	58.3%
夫が家にいて，妻が外に働き出るとしたら恥ずかしい	34.6%
今の時代，大学を出ていないと恥ずかしい	22.9%

2人もいる。他方，日本人で楽しませるのを嫌がるのは25%，すなわち4人に1人しかいない。

日本人については筆者が行った別の調査でも同じような結果が出ている（木村 2002）。この調査は1999年に奈良県の小学校から大学までのある宗教系の私立学校の小学校6年生（125人），中学生（592人），高校生（1,796人），大学生（1,122人），計3,635人を対象に行った調査である。質問の内容は服装以外は異なるものだが，人の目が気になるという点でハリスの質問と共通している。表3に示したように，この調査結果においても全体的にハリスの調査結果とくらべて人の目が気になる者は少ない。

以上から何が言えるだろうか？　どうも日本人とかアメリカ人とかに関係なく，人はまわりの人間から受け入れられるべく，よい印象を与えるような言葉使いや，服装，物腰，態度になるようにするということだ。逆に言えば，悪い印象を与えるような言葉使いや，服装，物腰，態度をしないようにするということでもある。まわりの人間から受け入れられなくなり，時には友人から白い目で見られ，職場では下手をするとやめさせられるという危険性を伴うからである。ゴフマンはこれを「自己呈示」“presentation of the self”とか「印象管理」“impression management”と呼ぶが，要するに作った自分を出して，素の自分を隠しているということである（ゴフマン 1974）。

内心は服装や容姿など外見について言われるのが嫌なのに，互いにほめあったりするのは，まわりがみんなそうしているからとなると，そうしなくてはいけないという社会的期待が圧力になって，この期待に同調しているということになる。3人に2人のアメリカ人は冗談など言って人を楽しませるのは嫌なのに冗談を飛ばすことについても同じことが言えよう。アメリカ人がほめたからといっても，3人に2人は本心からではなく，単なる社交辞令か内心は何とも思っていないか，逆のことを思っているのを社会的圧力で嫌々ながら言っていることになる。「アメリカ人は思ったことをストレートに言う」というのはこの調査結果からすると，最大83%のアメリカ人について，そして最低でも61%のアメリカ人については神話と言えそうである。

3つの事実誤認

以上からすると，世界に通じるコミュニケーションスタイルを日本人も身につけよう

というスローガンの下，行われている英語教育やグローバル社会に通じる人間の育成のかけ声の下で行われている教育や研修は3つの事実誤認とそれにもとづく過ちを犯していると言える。過ちの1つは「英語を話すときはイエス，ノーをはっきり言うとか結論を先に」という「注意」は，英語を話す相手はグローバル，すなわち地球規模と言いながら英語を母語とする国の人びとだけという想定をしている。しかし世界の共通語たる英語でコミュニケーションをとる相手は英語を母語とした8カ国の人びとだけでなく，それ以外の人びとがいる。そして後者の方が圧倒的に多い。何故なら世界には200前後の国があって，それらの人びとと日本の外でコミュニケーションをとるときたいていの場合，それらの人びとの母語や日本語で話すのではなく，共通語たる英語で話すからである。それらの人びとのコミュニケーションの取り方，すなわちコミュニケーションスタイルには，必ずしも結論から先に言うものでなかったり，イエス，ノーをはっきり言うのは礼を失しているとするものもある。このような多様性を無視して英語母語話者のコミュニケーションスタイルを絶対視していること，これが第1の事実誤認であり過ちである。

英語教育なり日本人のグローバル化の試みの2つ目の事実誤認は，英語を母語とする国といってもアメリカの他にカナダ，イギリス，アイルランド，オーストラリア，ニュージーランドなどがあって，これらの国の人びとがみな思った通りにものをストレートに言うというステレオタイピングをしていることである。たとえばイギリス人の婉曲表現という言い方がある（Anglo-EU Translation Guide）。これは都市伝説かもしれないが，京都の「ぶぶ漬け（お茶漬け）でもいかがですか」と言って遠回しに帰ってくれと促す表現と同じくらいにストレートにとれないコミュニケーションスタイルである。すなわち英語圏といっても多様性があることを無視して，アメリカ人流のコミュニケーションスタイルをお手本にし，それで通じると想定している点が第2の事実誤認とそれにもとづく誤りである。

第3の事実誤認はそのお手本にしているアメリカ人についての言説，たとえば「人の目を気にしないで思ったことをストレートに言う」などを批判的に見ようとしないで，そのため事実に照らさないで，すべて事実だと思い込んでいる点である。

以上からすると，お手本にしたアメリカ人像は大多数のアメリカ人に当てはまらないのにもかかわらず英語を学習してグローバル社会に通用する国際人に自らを仕立て上げようとする日本人は，その虚像のアメリカ人になろうとすべく，居心地が悪いほどにイエス，ノーをはっきり言ったり無理して冗談を言ったりし，相手の外見についてほめたりする練習をしているということになる。実像のアメリカ人は内心は人の目を気にしているのを，人前では人の目を気にしない自分を演じているだけというのが大方だからである。

アッシュの実験

アメリカ人も人の目を気にする，いやアメリカ人の方が日本人より人の目を気にすることを示す実験結果がある（Asch 1951）。それは図2の左側の棒線Aと同じ長さの棒を右側の(1)〜(3)の中から選ばせるという実験である。

結果は条件というか状況によって異なるというものであった。実験に参加した人たちは一人きりならみな(2)を選んだ。サクラ（実験協力者）を7人用意して，サクラ全員が間違った答，すなわち(1)か(3)を選ぶという状況を設定した。この状況においても“人の目を気にしないで自分の思ったとおりに行動する個人主義者のアメリカ人”は，“人の目を気にしてまわりに合わせる，同調する集団主義の日本人”と違って，だれも同調しないはずである。すなわちこの状況でも全員(2)を選ぶはずである。しかし実際は表4のアメリカのところに示した結果になった。日本人に対しても同じ実験が行なわれた。「日本人は人の目を気にする」が事実なら，日本人の方が同調者の割合がアメリカ人より圧倒的に多いと予想される。しかし日本―フレイガーのところに示した結果をみると，アメリカ人74%，日本人73.4%と，日米間で差がない。同調回数で言えば，アメリカ人の方が多い。その後の佐古による追試では日本の同調者の割合は減っている。また実験ではないが，自分が答える前の7人が全員，(1)か(3)を選んだとき，それでも(2)を選ぶかという質問を筆者は2011年春学期，愛知学院大学文学部の国際文化学科とグローバル英語学科の学生，170人に聞いた。このとき「同調する」と答えたものは14%しか

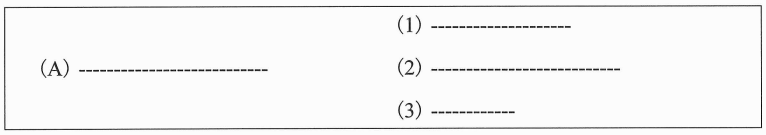


図2　アッシュ（Asch）の実験の概念図

表4　アッシュの実験結果と日本での実験結果との比較

	アメリカ	日本		
実験者	アッシュ	フレイガー	佐古	木村*
実験した年	1951年	1966年	1975年	2011年
被験者数	50人	128人	22人	170人
同調者数	37人（74%）	94人（73.4%）	11人（50%）	24人（14%）
非同調者数	13人（26%）	34人（26.6%）	11人（50%）	146人（86%）
同調回数	3.84回	2.92回	2.18回	

（アッシュ 1951，フレイガー 1966，佐古 1975，木村 2011）

注：独立サンプルによるKruskal-Wallisの検定によって，同調者数のちがいと同調回数の差は5%水準で有意。

いなかった。

この実験のおもしろいのは，サクラの数が1人，2人，3人と増えると同調する被験者も増え，4人以上になると同調者の割合は表4に示したようになった点である。すなわち，サクラのなかに同調しない人間が1人でもいると，同調した被験者の割合は5％に減ったのである。自分だけでは心許ないが，自分と同じ人がいると安心するというか自信を持てたからであろう。

なぜ同調したのかとアッシュが被験者に聞いたところ，3種類の答えが帰ってきた。1つは所属欲求が原因となっているもので，前の人たちの答えが誤りであることに気づいていたが，正解を言うと仲間はずれにされるのではと思ったためというものであった。2つ目は承認欲求がかかわっているもので，みんなが自分を笑うのではないかと不安になったからというものであった。3つ目は，自分が同調しないと実験が台無しになるのではないかと心配したためというものであった。

この実験結果からも，内心は人の目を気にしているのを，人前では人の目を気にしない自分を演じているだけという可能性が出てくる。状況に応じて意見や行動を変えるのは日本人の専売特許というのは，事実を歪めてでも，日本人をおとしめようとする偏見と言える。アメリカ人のように自己主張できないのは自分がシャイなあるいは内向きな日本人だからという誤った認識に伴う劣等感は持つ必要のないものであるばかりか放っておくと自分をおとしめることになるのだから，むしろ払拭すべきものと言えよう。

2　「アメリカ人は，上下関係を気にすることない」の検証

「日本人は人の目を気にする」という言説のバリエーションに，「日本人は上下関係をすごく気にする」という言説がある。この主張の根拠として日本人は初対面同士だと，すぐに出身大学を聞いたり，勤め先を聞いたりして相手が自分と同等か，上か下かを確かめないことには落ちつかなくて会話ができないということがよくあげられる。この言説によると上下関係意識はお互いをどう呼ぶか，第三者をどう呼ぶかという呼称にも表れていると言う。アメリカ人は相手が先生であってもファーストネームで呼ぶ。それは相手を肩書きで見ないで，対等な一個人としてみて，お互いに対等な一人間として関係を持つからだと言う説明がよくされる。そのようなアメリカとくらべて，日本では学校の教師だけでなく，お医者さんも政治家もはみな先生という呼称で呼ばれるのは，上下関係を気にするからだと直ちに言えるだろうか？　箸を使って食べる食べ方もあればフォークを使って食べる食べ方もあるように，上下関係の表現のされ方は多様であるはずだ。アメリカは上下関係があるのにないという社会だとしたら，その1つの要因として，平等が自分たちの社会の誇りになるほど支配的な価値になっているということがあるかもしれない。そのような社会においては上下関係は意識の底に沈殿している可能性がある。

実際より重要にみせる肩書き表現

アメリカ人がファーストネームで呼び合い，肩書きを気にしないとすると，説明のつかない真逆の現象がある。筆者がアメリカで会ったある男性は自分のことを“night custodian”（夜の管理職）だと自己紹介した。銀行かどこかの会社の重役かと思ったら，実は小学校の用務員だった。またある歯科医の奥さんは夫のことを“Dr～”と呼んで夫の社会的地位を強調していた。これはたまたまこの人たちだけかと思い，見回してみると，セールスマンのことを“account executive”（経理重役）という肩書きを付けたり，また大学には“Vice Provost”（副学長）が何人もいた。日本の大学でいえば事実上，学部長とか教務部長といった部長の地位を膨らましてこのような呼称で呼んでいたのである。

もしありのままの自分でいいのなら，社会的地位や組織内での地位をこんなに膨らました肩書きで強調しないはずである。アメリカとの仕事経験のある人たちもこのような報告をしている。

> 若い大卒がディレクターやマネージャーならば，ちょっとできる方たちは直ちに副社長です。米企業では副社長がやたらとたくさんいます。そのために，上下や仕事の重さを示すために，上から次のようにつけます。Executive Senior Vice President, Executive Vice President, Vice President。それぞれの Vice President の後に～担当と付け加えます。ですから，Executive Senior Vice President / Marketing, Executive Vice President / Marketing / Japan, Vice President / Marketing of (製品名) / Japan などとなります。（遠藤）

オトキタというブログ上の名前の28歳の日本人男性は2008年の時点でこの肩書きのインフレぶりについて以下のように報告している。

> 外資系企業での部長（マネージャー）の多さは外部から見たらちょっと異常に思われるのではないだろうか。名誉のために名は伏せるが，某O氏が所属する企業では派遣スタッフ以外はほぼ全員マネージャーである。（中略）係長も課長も部長も全部マネージャーだとそんな具合になる。更にわかりやすいのが「ヴァイスプレシデント」という役職で，日本語に直訳すれば副社長だ。重役である。日本企業で副社長といえば2人までと相場が決まっているが（参考文献：課長島耕作），外資企業ではこれを事業部長程度の意味合いでバンバン使う。（OTK 2008年10月22日）

日常の会話の観察結果

日常の会話を観察して，会話している人たちが無意識のうちに準拠している会話の仕方をつかみ出して，そこにどのような権力関係などが作用しているかを分析する社会学の分野がある。エスノメソドロジー（ethnomethodology）という分野だが，“ethno”は人びとという意味で，人びとが会話をするとき会話を進めるために無自覚のうちに用いている method すなわち，方法を研究する分野である。会話は誰が開始して，誰が終えるか，誰が相づちを打つか，立ち位置や視線はどうなっているなどを基準にしてみると，

対等な間では，会話をしている誰が開始しても終えてもいいし，相づちを打つのも双方である。しかし筆者がアメリカの大学院に留学していた時，指導教官の研究室に指導を受けに行ったとき，筆者は指導教官のことをプロフェサーシュウォーツと呼ばないでファーストネームのマイケルと呼んでいた。しかし用件を言って，相手にしてもらえるかどうかは指導教官次第だった。従っていつ会話，この場合指導を終えるのかの権限も彼にあった。会話（＝指導を受けること）を学生の筆者から打ち切ることはできなかった。指導教官は時には窓を見ながら話をしていたことがあった。指導を受ける筆者が壁を見ながらマイケルの話を聞くことはありえなかった。他の教員たちの研究室に行くときも同じパターンであった。筆者が日本人であるが故に遠慮が働いているかもしれないと思い，アメリカ人の学生を見ても同じパターンだった。ちなみに筆者の職場である愛知学院大学で学生を研究室に呼んで個別指導をするときを振りかえってみても，同じパターンでコミュニケーションをとっている。以上から会話の仕方ないしは形式からすると，ファーストネームで呼び合うからといって上下関係がない，対等な間柄というのは神話であると言えそうである。

電気ショック実験

上下関係というのは，権力関係と権威関係の２つに分類できる。権力関係とは一方が他方に従わないと制裁をする手段や権限を持っている者と持っていない者との関係であったり，逆に報酬を与える権限を持っている者と持っていない者との関係である。たとえば武器を持った人間とそうでない人間，警察官のように公務執行妨害で逮捕するといった法的制裁を科する権限を持った人間と職務尋問される側，採用，昇進・降格，退職などの人事権のある地位とか役職に就いている者とそういった権限のない者，目的遂行のための予算を配分する権限のある部署（たとえば経理課）の所属者，あるいはそういう役職についている者とそうでない者との関係である。これらの手段や権限が権力であり，権力のある者は権力によって相手が納得できないことでも嫌がることでもさせることができる。

他方，権威関係というのは制裁や報酬のための手段や権限は持ち合わせていなくとも，特定のポジションや社会的地位に就いている人間の言っていることや考えの前には自分の言っていることや自分の考えは大したことではないと感じてしまい，そのような人たちの言っていることや考えを受け入れ，時には納得できない指示さえも受け入れてしまうという関係である。医師，弁護士，解説者，大学教授，評論家，コンサルタント，監督などのように専門的知識や卓越した技能を有した専門家とか教義に基づく説教や儀礼や服装，話し方によって独得の雰囲気を醸し出す宗教家やオーラとかカリスマをもった人物が権威の典型例である。

もしアメリカ人が人の目を気にしないで思った通りに行動するというのが事実だとすれば，権威に屈服せず，権威の指示を跳ね返すはずである。はたしてその通りなのかど

うかを示す実験結果がある（ミリグラム 1995）。その実験は1950年代の最初の頃，アメリカの東部のコネチカット州の2つの大学で行われた。実験の表向きの目的は，誤読をさせないある方法の効果を図るというものだった。しかしその真の目的は権威に服従するかどうかをみようとするものであった。そのやり方はこうである。誤って読むたびに電圧をあげるように実験の関係者は被験者に指示をする。ボルトが上がると，誤った読み方をした人（実はサクラ）は次第に苦痛の声を上げ，最後は壁をむしり，失神してしまう。そこまでボルトを上げる被験者が表5に示したように最大65％もいた。そのような被験者に後で聞くと途中でやめたいと思ったと言うものもいた。しかし実験者に継続するように言われるとノーを言えなかったと言った。これは実験者という専門家の権威，専門家の所属する大学という権威にいわば服従したアメリカ人が最低でも47.5％，最大で65％もいたということである。それも権威のある大学の方が，また専門家の権威を象徴する白衣を着ている場合に服従するものの割合が大きかったのである。

ちなみに筆者は2011年春学期，愛知学院大学文学部の国際文化学科1年生対象の科目，国際文化入門というクラスの受講生58人とグローバル英語学科の異文化理解入門という科目の受講生112名にアンケートの形で聞いてみた。最後まで行くと回答したのはいずれのクラスも0人であった。

表5　最後の450ボルトまでいってしまった人たちの割合

	ブリッジポート大学（二流大学）	イェール大学（名門大学）	大学の権威の効果
Eが私服の場合	2.5％	20％	17.5ポイント増
Eが白衣を着ている場合	47.5％	65％	12.5ポイント増
実験者の権威＝白衣の効果	45ポイント増	45ポイント増	

注：Eというのは experimenter の略で，実験者の意味

信念の人は信念を曲げないか？

それでは一般の人ではなく信念を持った人なら，同調したり社会的圧力に屈しないのだろうか。そういう信念の人の一つのタイプとして聖職者がある。南部の州の一つであるアーカンサス州リトルロックという都市にある白人子弟の通う高校，別の言い方をすれば黒人子弟を排除する高校すなわち人種隔離をしていた高校に1957年，9人の黒人生徒が学校における人種隔離の撤廃を目指した公民権運動の一環として，秋学期の入学手続きをしに行った。リトルロックは学校も住宅地域も人種隔離が行われていた。これよりさかのぼること3年前の1954年，最高裁は学校における人種隔離を憲法違反とする判決，いわゆるブラウン判決をだしていた。公民権運動の活動家同様，人種隔離撤廃のためにリトルロックの白人牧師たちも当初，人種隔離を撤廃しようとするこの動きに賛成の意を表明した。しかし圧倒的多数の白人住民，すなわち白人信徒たちは人種隔離

撤廃のこの動きを好ましく思っていなかった。1956年に広く南部の白人を対象に行われた全米世論調査センター（NORC）による踏査によると，学校の人種隔離撤廃に賛成する南部白人は7人のうち1人という割合だった（Sheatsley and Hyman 1956 pp. 35–39）。アーカンサス州の白人を対象に行われた調査では学校の人種隔離撤廃に賛成する白人は5人のうち1人という割合だった（Tumin 1957 p. 100）。

白人聖職者たちが所属するプロテスタント教会の全米本部や地方支部は最高裁の判決支持を表明していた。自己の宗教的信念を説教の形で伝えるのを天職としている牧師達であったが，教団本部の人種隔離撤廃の立場を圧倒的多数の信者が隔離撤廃に反対する状況では次第に口をつぐむようになった（Campbell and Pettigrew 1957，2011）。ちなみにベトナム戦争時，アメリカのベトナムへの介入に反対の立場をとるプロテスタントの牧師についても同じことがみられた（木村 1988）。

人種的偏見という文脈で見ると：対面状況と被対面状況でのズレ

古くからアメリカに対しては人種，信条，宗教の異なる人々が互いを認め合いながら混じり合って暮らしている国というイメージが“メルティングポット”や“サラダボール”の言葉によって受け継がれてきた。そしてやる気さえあればチャンスが平等に開かれているアメリカでは誰でも親の代より豊かになれるとするアメリカンドリームもアメリカについてすぐ連想されるものである。

これらのイメージの中のアメリカ社会には人種的偏見も人種差別もない。仮にあったとしても，ないこととされている。しかし「ないはずである」という空気すなわち建前が強くなると，人はあってはいけないもの，ないはずのものを（ここでは人種的偏見を）ひそかに隠さざるをえなくなる。隠し持っているのだから，テレビのインタビューといった公的な場面では容易に出なくなる。しかしテレビといった公的な性格でない状況とか仲間内といった私的な関係では隠し持った偏見，言い換えれば潜在化した偏見が露わになると考えられる。

この推測を1つひねりをきかした形で裏付ける研究がある。リチャード・ラピエールという社会学者の参与観察型の調査研究である（Lapier 1934）。ラピエールは1930年と1931年の2年の間に，2度に亘って自分が指導する中国人の学生とその奥さんを同伴して，全米各地を旅行した。その間，ホテルなどの宿泊施設66か所に泊まり，184のレストランなどで食事をした。これらの施設の中には有色人種に対する偏見が強いと知られているものも少なくなかった。しかし予想に反して断られたのは1軒のホテルだけだった（p. 232）。断った1軒というのは，ラピエールが同伴した中国人のことを「日本人野郎」，“Jap”と思ったホテルの人間に断られたケースであった（p. 233）。他のレストランやホテルでは断られなかったが，これら98.5％の施設の関係者が断らなかったのは本心からだったろうか？　この疑問を解明すべく後日，ラピエールはこれらのホテルやレストランに中国人は受け入れるかというアンケートを送付した。対面状況での受入れ

率は98.5％であった。本心から受け入れたなら，同じ割合のホテルが受け入れると回答するものと予想される。まずホテルの回答であるがアンケートを返却してきた22軒のホテルのうち受け入れると解答したのは1軒，5％の施設しかなかった。1軒は場合によるというあいまいな回答だった。次にレストランの回答であるが対面状況では断ったレストランは1軒もなかった。これが本心からならば，断るというレストランは0軒，0％のはずである。しかし回答してきた42軒のうち，39軒，93％のものが断ると回答してきた。うち1軒，2％は明確に断り，2軒，5％は場合によるというあいまいな返答だった（LaPier p. 234）。

行きずりの会話，私的な会話に顔を見せる偏見

筆者が1981年に家族を引き連れてニューヨークの郊外の大学に留学したとき，住宅を探しに，アパートの建ち並んでいるところに行った。そこにいた2人の老人は，「ここにはヒスパニックはいないから大丈夫だ」と言った。自分のことを夜の管理職といった用務員の男性は私がブルックリンに行くと言ったら「あそこは黒人が多いから気をつけなよ。車をその辺にとめると，ハンドル以外皆盗まれるからな」と注意して“くれた”。1980年代に筆者が留学していた大学はロングアイランド島の北部にあったが，30数キロ南に行くとそこはもう海岸だった。その海岸沿いにある町に行くと言ったら，「あそこはヒスパニックが多くて危ないぞ」という忠告をして“くれる”白人が何人もいた。その町には何度か行ったが，危ない目に遭ったことは1度もなかった。1991年にボストンとその周辺の住民の人種的偏見や民族的偏見，宗教的偏見の調査のために彼らの住んでいる住宅地区をみるべく車で回った。その時も同じような忠告をして“くれる”人がいた。信号待ちをしていたら白人のトラック運転手が，「ここはやばいところ（bad neighborhood）だから早く立ち去った方がいいぞ」と忠告して“くれた”。

世論調査

1904年から不定期に行われている全米を母集団としたサンプル調査がいくつかある（Schuman 他 1997）。それらの調査結果の平均を表6に示したように算出した。差別や隔離の撤廃への反対を総論，一般論あるいは理念の上でも反対する回答者が出現した％

表6　理念・措置の両次元への反対を領域によって変動があるか見てみると

		領域					
		総論	公共	就職	学校	住宅地	結婚
反対の次元	理念	15％	21％	7％	20％	13％	40％
	法的制裁をともなう措置	－	44％	64％	64％	58％	67％
理念では隔離撤廃に反対していなかったが実行力を伴う措置になると反対する回答者の割合		－	23％	57％	44％	45％	27％

と法的制裁をともなった隔離撤廃（各論）への反対に分けてみた。理念レベルで隔離撤廃に反対するものの割合よりも実効性のある法的制裁に反対するものの割合が大きい。さらには距離があって接触の頻度が少ない状況とくらべて，結婚という状況での隔離に反対するものの出現率は大きくなる（木村 1998，2007）。潜在化した偏見を隠しきれなくなったためと考えられる。

非整合性を類型化

この非一貫性と言おうか，非整合性，言い換えれば矛盾を人種的偏見（その欠如としての人種間平等意識）と行動としての差別の間の矛盾として考察した人物にロバート・マートンがいる。マートンは図3に示した類型として提示した（Merton 1976）。マート

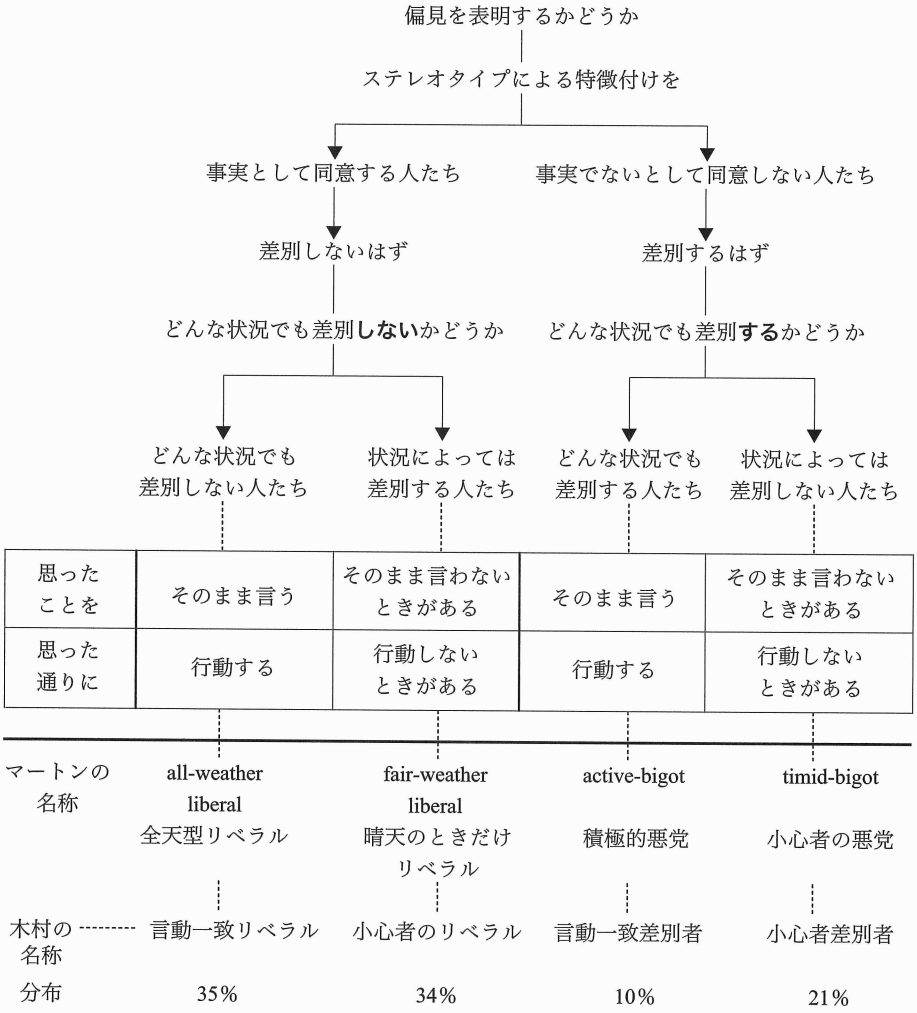


図3　マートンの類型

ンは偏見と差別の局面で，思い通りに行動できる人間とそうでない人間とに分けた。前者には2つのタイプがいる。一つはどんなときでも表明した態度（マイノリティにたいする否定的な特徴付けへの否定）どおり差別をしない，言動一致の理想的なリベラルである。後の一つはどんなときでも表明した態度（マイノリティにたいする否定的な特徴付けへの肯定）どおり差別する，すなわち「言動一致の確信的な差別者」である。

思い通りに行動できない後者も2つのタイプにブレークダウンできる。一つは状況によっては（天候で言えば晴天や快晴のときは）表明した態度（マイノリティにたいする否定的な特徴付けへの否定）どおり差別しないが，状況によっては（曇りや雨といった悪天候のときは）表明した態度とは裏腹に差別する「小心者のリベラル」である。後の一つは状況によっては（曇りや雨といった悪天候のときは）表明した態度（マイノリティにたいする否定的な特徴付けへの肯定）に反して，差別を控える「小心者の差別者」である。

各タイプの分布

1976年の時点だが「黒人は犯罪の温床と思うか」と聞かれると「そうだ」と答えるものは全回答者のうち31％であった（Roes 1990 p. 173）。これらの回答者は黒人のことを犯罪を起こす人たちだという恐怖心がある。従って，住宅隔離を撤廃して統合する怖い黒人が近所に引っ越してくることになるので，これら31％の白人は住宅統合に反対するものと予想される。しかし別の調査結果によると，「どこに引っ越すかは黒人にも権利があるか」という質問に「ない」と答えたのはわずか10％しかいなかった（Schuman, Steeth, Bobo and Krysan 1997）。黒人を犯罪の温床と答えた31％の残りの21％のものは住宅地における人種統合に反対しなかったということになる。

「黒人は犯罪の温床と思うか」に同意しなかったものは全回答者のうち69％いた（Rose 1990 p. 173）。額面通りに受けとるとこれら69％の回答者は黒人に偏見がないと思われる。本心から偏見がないなら，言い換えれば犯罪を起こす人たちだと思わないなら，黒人が近所に引っ越してきても犯罪を起こして被害を受けるという心配や恐怖心がないということになる。そういう恐怖心がないなら，黒人が近所に引っ越してくることになる住宅隔離を撤廃することに，すなわち隔離の理念には賛成するかと聞かれると全員，賛成すると予想される。すなわち隔離撤廃に賛成する者は69％のはずである。予想通り，全員，賛成すると予想されるところである。

ならば各論になっても，言い換えれば住宅隔離のための具体的な措置にも賛成するするはずである。しかし措置に賛成するものは回答者のうちで35％しかいなかった。「黒人＝犯罪の温床」を否定した69％のうち半分のもの，すなわち34％のものは隔離撤廃のための具体的な措置になると反対に回ったことになる。これはそれまで隠し持っていた黒人への恐怖心が喚起されて反対したからだと思われる。以上からアメリカの白人の33％前後のものは黒人のことを本当は犯罪の温床と思っているが，それをストレートに

表さないと推測できる。

1976年時点で偏見の有無と住宅隔離撤廃の措置への賛否とのからみでみると，これら4タイプはどのような割合で存在するかを図3の“分布”のところに示した。（木村 1998 p. 282）。

シューマンとハーディングの発見した対照的な２人：共感という次元

ストレートに表さないで隠し持つ理由として3つのことが考えられる。1つは公民権法が成立してからのアメリカ社会においては黒人への偏見を公の場で表明することをいけないこととする空気が社会で強くなったことである。2つ目は黒人からの抗議を恐れていることである。3つ目は自分はリベラルだというアイデンティティを保持したいという気持ちやレーシストと批難されるのを恐れる気持ちである。

逆にこれらにかかわらずストレートに自分の考えを表明する人たちもいるが，これらの人はまわりの目を気にしない人たちである。その立場によっては言動一致リベラルと言動一致差別者に分かれる。何故彼らは言動不一致を引き起さないのか？　黒人への差別に反対し隔離の支持をどのような状況でも表明する要因として，経済的余裕，実際に黒人が近くに住んでいないことからくる余裕，あるいは自分はリベラルというアイデンティティなどが考えられる。それ以外に共感という要因も考えられる。リベラルだから共感するとか，保守だからしないというもののようではないようである。言い換えれば政治的に保守的であっても経済的に余裕がないからと言って，黒人の境遇に思いを寄せないというわけのものではないようである。

シューマンとハーディングという社会学者は1963年に行った調査で，対照的な2人の人物を提示している。あるボストン在住の中年の白人女性はアンケートでは黒人への偏見を示さなかった。事実，この女性にインタビューしたところ，彼女が人種的偏見や住宅隔離などの人種差別に反対するのは「キリストがお望みでないものだから，間違ったこと」と言う（Schuman and Harding 1963 p. 240）。さらには「人のためになること，つまり人を助けること」に生きがいを覚えるとまで言う。ところが北部の公民権運動家が南部に行って，白人専用のトイレや黒人を入れないレストランに抗議のためにわざと入ろうとしたことについて，なぜこのようなことをしたと思うのか聞かれると，それまでの明確な態度はあいまいなものになる。この女性は困っている黒人たちに目を向けるのをやめて，代りに南部の白人たちに目を向ける。そしてこのような変化を「南部の白人がどう思っているか，北部の私たちには分からない」と不可知論の立場をとって質問に答えようとしなかった。何度か聞かれた末にようやく「北部の人間としてはそういった人種の壁があると思うだけで，心が傷つくわ」と答えるも，南部の黒人たちの身になって考えようとはしなかったのである。「（人種隔離の状況が常態となっている）あのような状況で育っているから黒人たちは慣れっこになっていることだろうし，自分たちが行ってはいけないことになっているレストランなどに行くと，かえって妙な気分にな

るのではないかしら」。以上から，この女性ははっきりは言わなかったが，南部の黒人が被差別の状況に陥っているのを看過できなくて直接行動して差別を撤廃しようとした北部の白人の行動を実は支持していないのである。

“思ったこと”をそのまま口にするとか，行動にするというときの“思ったこと”というのは“イエス，ノーをはっきり言う”アメリカ人というアメリカ人像のようにそう単純な話ではないようである。この女性の自己認識としてはおそらく自分はキリスト教の信仰から人種差別に反対するよきクリスチャンと思っていたのだろうと思われる。しかし実際に彼女は気がつかないだけだと思われるが，彼女の意識の中核には困っている人の身になって考えるという共感ないしは感情移入しようとする気持が欠如している。同じ白人ということで南部の白人の身になって考えるいわば身内意識がこの女性の本心であろう。

この女性と対照的な人物がいる。55歳の失業中の白人男性で，リュウマチのために手足が自由に動かない。結婚もしていない。この人物は住宅隔離は絶対すべきだと思っていて，さらには黒人のことを「家畜と変わらない暮らし方をしていて，感じの悪い連中」と決めつける（p. 240）。労働者階級によく見受けられる黒人を嫌悪感とともに上から目線で見下す権威主義的な見方である。シューマンらは，このような偏見の目で黒人を見るのは，この男性がいわば負け犬状態にあるためと，本人が言うように，黒人の若者から脅しを受けたからかもしれないと解釈する（p. 241）。

たしかにこの男性は黒人の若者からの脅しなり侮蔑の言葉もなげかけられたりしたことであろうが，黒人が白人に対して抱く憎しみを一方的にとらえない。「白人が奴らのことを憎んでいるのだから，そりゃあ黒人だって白人を憎むさ，それは」と黒人の気持ちになってみるのである。そして黒人の身になって考えるというのは，シューマンらの言葉を使えば，「共感的同一化」（sympathetic identification）であるが，この男のはどうやら本物らしいと思わせる次の言葉を吐いている。

> やつらが白人を憎むのは，長いことこづき回されてきて，何年もいやな思いをさせられてきたからじゃないかなぁ。奴隷として連れてこられてきた彼らに，南部の白人たちは教育も受けさせてきていないし，仕事にもつかせてきていない。それではいつまでたっても一定以上の暮らしはできないわさ（p. 241）。

最後に

偏見がないからといって人種隔離の撤廃に賛成するわけでもないし，反差別の行動をするわけではない。この意識と行動の非一貫性の謎を解く鍵に共感の有無があるように思う。この共感の有無は果たして，たとえば上記の白人男性のように，偏見を表に出すかどうかに関係なく差別を差別として認知する力になっているのか，さらにはマイノリティを受け入れる力になっているかという疑問の解明を次の課題としたい。具体的に

は，筆者もかかわったアンケート調査の回答をデータにして検証したいが，それは別の機会に報告すると予告して本論を終えたい。

参考文献

注：筆者の苗字によるアルファベット順（欧米人の名前も最初が苗字）に並べている。

Anglo-EU Translation Guide.
http://www.scribd.com/aoc/55551980/Anglo-Eu Translation Guide

Asch, Solomon E. 1951 "Effects of Pressure upon the Modification and Distortion of Judgements" H. Guetzknow (ed.) Groups, Leadership, and Men pp. 177–190. Carnegie.

Bailey, Arthur Allan. 1990 "How Their Early Education Makes it Difficult for Japanese University Students to Learn to Speak English"『愛知学院大学文学部紀要』20号 pp. 213–226.

Campbell, Ernest Q. and Thomas F. Pettigrew. 1959 "Racial and Moral Crisis: The Role of Little Rock Ministers" *American Journal of Sociology* 64–5 (March) pp. 509–516.

——— 2011 *Christians in Racial Crisis: a Study of Little Rock Ministry* Nabu Press.

遠藤安岐子「ビジネス英語なんでも相談室」
http://www.eigotown.com/jobs/business_english/ask/ask132.shtml

Frager, R. 1970 "Conformity and Anticonformity in Japan" *Journal of Personality and Social Psychology* 15 pp. 203–210.

フレイガー, R.　1969 「伝統主義とコンフォーミティ」『年報社会心理学』第9号

布留川勝『パーソナル・グローバリゼーション——世界と働くために知っておきたい毎日の習慣と5つのツール』幻冬舎メディアコンサルティング

ゴフマン, アービン（著），石黒毅（訳）　1974 『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房

Harris, Louis. 1987 *Inside America* Vintage Books.

ホール，エドワード T.（著），國弘正雄（翻訳）　1996 『沈黙のことば』南雲堂

家永三郎　1947 『日本思想史における宗教的自然観の展開』斎藤書店

犬養道子　1986 『日本人が外に出るとき』中央公論社

賀川洋　1997 『誤解される日本人——外国人がとまどう41の疑問』講談社インターナショナル

———　2001 『ビジネスバトル日本人 vs 外国人——異文化摩擦28番勝負』講談社インターナショナル

木村英憲　1988 「ベトナム戦争をめぐるアメリカ宗教者の協力と対立——保守派プロテスタント雑誌による報道をとおして」中央学術研所編『宗教集団間の協調と葛藤』中央学術研所 pp. 117–132.

———　1998 『感情移入欠如としての偏見：怖がり屋であいまいが好きな「小市民リベラル」』『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』13号　pp. 254–302.

———　2002 『人権教育調査活動報告書』学校法人天理大学人権教育推進室

———　2007 「感情移入欠如としての偏見 その2：なぜ人は思い通りに行動できないか」『愛知学院大学文学部紀要』37号　pp. 101–114.

LaPier, Richard T. 1934 "Attitudes vs Action" *Social Forces* pp. 230–237.

Merton, Robert. 1976 "Discrimination and American Creeds" *Sociological Ambivalence and Other Essays* pp. 189–261.

ミルグラム，スタンレー（著），岸田秀（訳）　1995 『服従の心理――アイヒマン実験』河出書房新社

ニーチェ，フリードリッヒ（Friedrich Nietzsche）（著），氷上英廣（訳）　1967 『ツァラトゥストラはこう言った』岩波書店

OTK　2008 「Seniority と Meritocracy」『愛と虐殺の日々』http://otokita.seesaa.net/article/108467846.html

Rose, Peter. 1990 *They and We: Racial and Ethnic Relations in the United States* McGraw Hill.

佐古秀一　1977 「同調行動の実験文化心理学的研究」大阪大学人間科学部　卒業論文

Sheatsley, H. H. and P. B. Hyman. 1956 "Attitudes towards Desegregation" *Scientific American* CXCV (December) pp. 35–39.

Schuman, Howard and John Harding. 1963 "Sympathetic Identification with the Underdog" *Public Opinion Quarterly*, Summer 63, Vol. 27 Issue 2, pp. 230–241.

Schuman, Howard, Charlotte Steeth, Lawrence Bobo and Maria Krysan. 1997 *Racial Attitudes in America:Trends and Interpretations (Revised Edition)*. Harvard University Press.

田崎清忠　1989 「日本文化落書き帖」『時事英語研究』 4月号

Tumin, M. M. 1957 "Segregation and Desegregation" Anti-Defamation League of B'nai and B'rith.